慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	危機時代のスイス家族を描いた小説 : イングリーンの『スイスを映す鏡』の主題と構造
Sub Title	Schweizer Familienbild in den Jahren der Krise : Thema und Strukur von Mainrad Inglins "Schweizerspiegel"
Author	宮下, 啓三(Miyashita, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.148(79)- 164(63)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

危機時代のスイス家族を描いた小説

——イングリーンの『スイスを映す鏡』の主題と構造——

宮　下　啓　三

1．第1次世界大戦前夜のスイス

スイスの作家マインラート・イングリーンの『スイスを映す鏡』が出版されたのは1938年，第2次世界大戦開始の前の年だった。1060ページ余りの大作であるこの小説は，第1次世界大戦の時期のスイスを描いているが，その内容は第2次世界大戦時のスイスの運命とスイス人の態度を理解しようとする者の役に立ってくれる。

この小説は6つの大きな部分からできていて，1914年から1918年までの第1次世界大戦の時期を包み込む形でストーリーを展開させている。その物語は，スイス最大の都市であるチューリヒのアマン家の人々の生活と行動と意見を描くことによって組み立てられていく。

それに先立って「プロローグ」と呼ばれる短い序章が置かれている。この序章は次のように語りはじめられる。

1912年9月，ドイツ皇帝がスイスに来たのは，第3軍団の演習を視察するためであって，皇帝にとってはとるに足らないことだったのだが，ささやかな共和国にとっては，即位後20年もの間このような視察をドイツ皇帝がおこなったためしは一度もなかったから，センセーショナルなできごとであった。

雨が降って涼しい秋の日，やんごとない客人はおおぜいの従者を引き連れてチューリヒに到着し，皇帝の身分にふさわしい過去を持つと思われた屋敷，すなわち旧ヴェーゼンドンク家別邸に宿泊した。ブルジョワ新聞はうやうやしい文体で皇帝歓迎の論説をかかげ，駅では政府高官が挨拶を述

べ，儀杖隊が整列し，旗でかざられた街路でのパレード，民衆の歓呼。これらが，ドイツ帝国の都会のどこにも劣りはしないほどはなやかな歓待を演出した。軍事演習のドラマの用意は整っていたが，こちらのほうはいっさい飾り気なく即物的に進行して，視察の時を待ち構えていた。第5師団が，青軍の一翼をなす軍勢というふれこみで，戦闘体制を整えてチューリヒ湖から北東方向に前進し，この日，その先頭部隊が，ボーデン湖方面から接近してきた赤軍の一翼の役をつとめて，すでにヴィール近くの，トゥーア川が曲がる地点まで進出したと仮定される第6師団と衝突することになっていた。あとは天気のよくなることが待ち望まれるばかりであった。雨天が数日つづいたあと，またしても霧の群れがチューリヒ市の上空を漂っていたし，明日ドイツ皇帝が訪れる予定の演習場が濡れてぬかるんでいると思っただけでさえ，だれもが腹立たしくなった。だが，天気だって気を利かすことがあるものであって，その夜のうちに，皆の予想を裏切って霧が晴れ，翌朝，思いがけず雲ひとつない空が全土をおおった。(1)

1912年にドイツ帝国のヴィルヘルム2世がスイスを訪問して，スイス軍の演習を視察したのは，まぎれもない歴史上の事実である。どこの国の元首であろうと，中立国スイスが軍事演習を視察させるということ自体，尋常なことであるとは思えない。いったい，この事実は何を意味していたのだろうか？　あるいは，作者イングリーンはこのできごとに，どのような象徴的な意味があると感じていたのだろうか？

この冒頭の部分からほんの少しあと，ドイツ皇帝と演習の両方を見ようとして多数のスイス人が合戦の場所に詰めかけるさまを描くくだりで，アマン家の兄弟たちが姿を見せる。

雑然とした人の列が延々とつづく中に，チューリヒから来た3人兄弟，ゼヴェリーンとパウルとフレート，すなわち旅団司令官アマン大佐の息子たちがいた。3人は，なかよく肩をならべるでなく，間隔をおいて縦になって歩いていた。それもそのはず，長男ゼヴェリーンが気ぜわしく早く進

みたがっているのに，パウルはぶつくさ文句を言いながら不承不承について来るだけだったからだ。末の息子のフレートは，どちらの兄に歩調を合わせたらよいのやら心をきめかねているように見え，間隔を縮めたり伸ばしたりしながら2人の間にはさまって歩いていて，3人が兄弟の関係であることをかろうじて証明する役割をつとめていた。(2)

このプロローグが描いているスイス史の事実と，フィクションであるアマン家の人々との関係は，読者にはまだ明らかでない。1912年9月のドイツ皇帝のスイス訪問の時点では，だれも世界大戦の勃発を予想していなかった。少なくとも，スイス人たちはそれを予想していなかった。

しかし，読者はやがて，この場面で描かれた3人の態度が，危機の時代のスイス人が選ばざるをえなかった3つの可能な道を象徴するものであったと気づくことになる。スイスの20世紀の歴史の現実を語ることと平行して，スイス人の苦悩を小説の形式で描こうとするのが作者イングリーンの意図であった。

この意図を作者はどのようにして実現したのか？　小説という名のフィクションによって，スイス20世紀史の重大な局面をどこまで切実に表現することができたのか？　読者となるスイス人たちに作者はどのようなメッセージをあたえようとしたのか？

2．苦難の予兆と父子の意見対立

現在の現実に対する無邪気な肯定が，のちに深刻な反省となって人間の良心のとがめとなることは，いつの時代にもある。1912年のドイツ皇帝によるスイス軍の演習視察の事例にもそれがあてはまる。

ドイツ皇帝の訪問とスイス軍の演習の視察を，のちになってスイスの歴史家たちが評価すれば，将来に予想される戦争，つまりドイツとフランスとの戦争の瀬踏みであったということになる。スイスが，永世中立国としての立場を守るために，その国土に攻め入ろうとする外国軍に対して可能なかぎりの力をふるって抵抗する覚悟でいる。その覚悟を軍事演習の形で

ドイツ皇帝の眼前で示した。このことは，ドイツの仮想敵国であるフランスに対して同じ態度をとることを保証したにひとしかった。フランス軍がスイスを経由してドイツを側面から攻撃することはありえない，ということの保証にひとしかった。だから，スイスの軍事演習を視察したあとでドイツ皇帝が「スイスのおかげでわが国は6個師団を節約できる」という感想をもった。(3)

スイス人たち，とくにドイツ語地域である東部スイス人たちは，同じ言語を用いていて，共通の文化を持つと感じるドイツに親近感を抱いていたから，なんの疑いもなしにドイツ皇帝を歓迎した。しかも，父祖から受け継いだスイスの国土防衛のための決意をドイツ皇帝の前でデモンストレーションできることを率直な喜びと感じていた。一説によれば，スイス軍の力を手ごわいものと感じたドイツ皇帝が，フランスを攻めるのにスイス経由の道をとるのをあきらめてベルギー経由とする決心をしたのはこの視察の結果であったともいう。(4)

小説の中にも，ドイツ皇帝のスイス軍視察の意味合いが話題とされる場面がある。第2部第7章，新聞の編集部員になったセヴェリーンが，もとスイス軍士官であった人から寄せられた論説を，掲載する前に父親に読み聞かせて意見を求めようとするくだりである。

「2年前」とゼヴェリーンは朗読した，「ドイツ皇帝がスイス軍の演習を視察した時，フランスの新聞の一つに小さな記事が載り，それはほとんど無視されたが，今に至ってみれば，皇帝のスイス訪問と今日ふたたびアクチュアルとなりつつあることがらとの関係を指摘していた。……」

……（中略）……

この論説の筆者によれば，ドイツ参謀本部による対フランス全面戦争の計画には，軍隊の一つをスイス経由で移動させるプランが含まれていた。フランスの参謀本部がこれを知った。したがって，フランスの軍隊が，右翼の安全を確保するために，可及的すみやかにスイスを横断してライン川がバーゼル付近で大きく曲がる地域を占領することがありうる，と思って

おく必要がある。

「ほんとうにこれを掲載する気なのかね？」とアマンが鋭い語調でたずね，立ち上がり，ゼヴェリーンの手から原稿を奪った。

「だから，言ったじゃないですか，載せる前にパパの意見を聞いておく気だって」とゼヴェリーンがおだやかに答えた。「とにもかくにも，ぼくは，われわれが今どんな状況に置かれているかを，世の人々に知らせる権利を持っていると思います」

「ばかなことを言うんじゃない」とアマンが叫び，怒りの目で息子を見つめた。「世の人々！　世の人々だと！　今いちばん大事なのは，国民の気持ちをしずめることなのだ。国民が分別を失ったらどんなひどいことになるか，おまえは考えていないらしいな。すでにここ数日，銀行でどれだけの預金が引き出されているか，この先，非常事態になったらどういうことになるか，パニック状態が外国にどんな影響をあたえることになるか，想像がつくだろう？　とにかく……」彼は手で拒否の合図をして，興奮のていで窓辺に歩み寄った。(5)

父親であるアルフレート・アマンは，スイス連邦国民議会（＝衆議院）の議員であり，スイス軍の高位の将校でもあるので，まもなく開かれた射撃祭で招待客を代表して演説をする。この射撃祭とは，愛国心と国土防衛意識の高揚のためにスイス各地で伝統的におこなわれてきた行事である。この場面でアマンはこう語る。

……「あらゆる点でわれわれがヨーロッパ文化の頂点に立つことを誇れるためには，何の助けによってわれわれがそうなりえたかを，けっして忘れますまい。それは，国民の精神と勤勉，国家の秩序と力であり――一言で言えば―祖国！　祖国であります！　ただの一言ではあっても，この言葉は一つの世界を言い表しています。……それは，われわれの名誉ある過去の全体を含んでいます。われわれの父祖がモルガルテンで，ラウペンで，ゼンパハで，血と力を注いで模範を示してくれて，今なおわれわれの胸を

高鳴らせているのです。……」

今やアマンは祖国愛の精神，前世紀のなかばに若い新鮮な風として古い同盟に新しい生命を吹き込んだあの精神を高らかに語った。演説の流れのおもむくままに彼は，あたかもこの国が相変わらず「約束の地」であるかのように語った。しかし，しめくくるにあたって，古いスイス盟約者同盟が現在の世界的状況に巻きこまれたことについてふれた。「今日ふたたび，不吉な脅威をはらむ嵐雲がヨーロッパの上に沸き上がっています。オーストリアがセルビアに宣戦を布告し，ロシアが介入すると言っておどしをかけて，すべての国々が途方もない緊張の状態にあります。ドイツが，フランスが，イタリアが，どうすることになるか，まだわかりません。戦争が東の方だけにとどまるか，あるいはわれわれの国境でも発火するかは，わかりません。いずれにせよ，われわれはまだ理性を失うわけにいきません。平和の維持の可能性はまだ残っています。……」(6)

モルガルテンやラウペンやゼンパハ。その昔，スイス中央の地域の代表者たちが「盟約」によって同盟したこと，そしてモルガルテンなどの土地で雄々しくたたかってハプスブルク家などの軍勢を打ち破ってスイスの独立の歴史的な基盤をつくったこと。スイスの連邦制度も民主主義も中立も，すべてこれにはじまる歴史の産物だった。そして19世紀のなかばにスイスは近代的な連邦国家としての体制を整えた。

父親であるアマンはこの歴史を肯定することのできる世代と階層に属する人物として描かれる。アマンは，リベラルな政党である自由民主党を代表する議員である。自由民主党とは，19世紀なかばに職人，労働者，農民および小市民の利益を代表して，それまで実権をにぎっていた都市貴族による古い支配体制をくつがえした。近代的な連邦国家としての性格をスイスに根づかせるのに貢献してきた。19世紀のスイス最大の作家としてスイス人たちの尊敬をえてきたゴットフリート・ケラーが文学的ないとなみを通じて擁護してきたのも，この自由民主党の路線だった。この政党の柱となっていたのは企業家たちであったが，彼らは自由放任主義をたっとんで

柔軟な姿勢で小国スイスの経済力を高めてきた。アマン家もまた，この理念を実践して家族の経済的基盤をきずいてきた。

しかし，父親の世代にとって誇りであるものが，息子たちの世代には矛盾をはらんで崩壊に近づいているものに見える。錯覚ではない。それは，第1次世界大戦によって揺り動かされて，にわかに表面化して，息子たちをジレンマにおとしいれることになる。

3．息子たちのジレンマの社会的な背景

すでに19世紀の末からスイス社会は大きな変化を見せていた。

産業の面では，機械工業が飛躍的に発展していた。鉄鋼業が外国との価格競争に太刀打ちできなかったかわりに，機械の輸出が大幅に延びた。1885年から1912年までの間に，金額にして1800万フランから9300万フランに伸びた。機械産業にたずさわる労働者の数は，1850年にわずか3300人であったのに，1908年には44000人に達していた。

スイスの山岳地帯の豊かなエネルギー源が発見されたことも経済の発展に大きな意義を持った。水力発電である。1891年にスイスの水で起こされた電気を遠くドイツのフランクフルトまで送ることがこころみられた。このエネルギーに支えられて，スイスの経済力はいっそう強まった。

ここまでは放任主義による自由な競争がもたらしたプラスの効果であるに違いなかった。しかし，これと表裏一体の関係をなしていたのが，スイス国民の社会的構造の変化であった。

産業人口の構造的な変化は，産業労働者人口の急増を意味した。彼らの労働環境と生活水準の向上のために労働組合が組織された。1902年に結成された「スイス労働組合同盟」は24000の会員を持っていた。この同盟が1904年にアムステルダムで「第2インターナショナル」に加盟した。同盟に加わるスイスの労働者の数は1912年に86000人に増えた。彼らは，自分たちの利益を代表する社会民主党とともに，階級闘争と私有財産撤廃をスローガンにかかげた。1907年にローザンヌでゼネストが敢行されて，これに参加した労働者とこれを妨げようとする警官隊との間で路上の衝突が起

こった。

工業の飛躍的な発展に脅威を感じたのは，企業経営者たちだけではなかった。農業にたずさわるスイス人たちは，労働力を工業に奪われつづけていた。労働力を確保したくても，上昇しつづける人件費を負担しきれなかった。地代の高騰も農業経営の基盤を悪化させる原因となった。あまつさえ，外国から輸入される安価な農業生産物に，コストの高いスイス農産物が勝てるわけもなかった。このような事情がかさなって農民たちも結束しようとした。こうして1897年に「スイス農民同盟」が結成され，政府から高額の補助金を得ることに成功していた。

企業家とブルジョワ，産業労働者，それに農民という，利害を異にする3つの集団が形成されている状況のもとで，スイスは世界大戦の時代を迎えることになった。

ドイツがフランスに宣戦を布告することが避けられない情勢になった時スイス連邦議会は，国民皆兵の伝統にしたがって総動員をおこない，スイス軍の総指揮官である将軍を選出した。この将軍選出が，東部のドイツ語系スイス人と西部のフランス語系スイス人の間の心理的な溝を作ることになったあたりから，スイスが内部に潜在させていた問題がしだいに浮かび上がるようになっていった。東部のスイス人はドイツに，西部のスイス人はフランスに，心理的な応援をしたとしても不思議ではない。この点についてイングリーンは小説の中で次のように書いている。

フランス語圏のスイス人とドイツ語圏のスイス人の，それぞれに言語で結ばれた隣国の運命への同情は，条件付きの無言の共感から，熱狂的な応援の意志表示に至るまで，じつにさまざまな形と程度であらわれた。二つの国々は，いろいろな意味での「強大国」の名にふさわしく，この親近感を歓迎したばかりか，露骨にこれを強化しようとした。大多数のスイス人は，この時に至るまで，これに対して深刻に思い煩うことがなく，東西二つのスイスの間に「地割れ」があることを認め，たがいに相手にその溝を生んだ責任をなすりつけあっていた。

尊敬を集める人々が登場して，スイス国民に忠告や教訓をあたえようとした。この国民啓蒙の輪舞の先頭に立ったのが，対立の外側に立っていたカール・シュピッテラーであって，1914年12月，孤独な傍観者の立場から抜け出して，二つに割れたスイス人たちに思慮深い言葉を投げかけて人々を驚かせた。この詩人につづいて，大学教授，文筆家，議員，ジャーナリスト，種々様々の素性と思想の人々が発言した。もちろん，その人たち自身がたがいに言い合うこともしばしばであった。……

祖国を心配する一心から，ジュノー教授もこの議論に加わったが，彼より先に発言した者たち，彼よりあとに発言する者たちとまったく同じように，苦い目にあわされた。ゼルヴィーンが真先に批判したのを受けて親ドイツ的な小新聞が，あえて同胞の感情を批判したこのフランス語系スイス人教授に対して非難した。善良なジュノー教授は，明らかに誤解され，真意を疑われ，中傷され，彼自身の親類縁者たちから除け者扱いされた。パウルだけが彼の考えを支持したが，そのためにパウル自身が両親や兄弟から白い目で見られることになった。(7)

シュピッテラーがスイス人として最初のノーベル文学賞を受けたのは第1次世界大戦が終わって翌年のことだったが，この孤高の詩人の受賞には大戦中に，言語の違いを理由に心理的な対立を見せるスイス人たちに連帯と結束を求めて勇気ある発言をしたことがあずかっていたことは疑いようがない。イングリーンはスイス現代史に名高いシュピッテラーの演説という歴史的事実に，チューリヒ大学のフランス語地域出身のジュノー教授というフィクションの人物を加えた。スイス史の現実に小説の虚構を兼ね合わせていく作者の手法がここに明瞭に見て取れる。

4．世界大戦の長期化が招いた現象とアマン家の人々

戦争に参加する国々に包まれた小国スイスは，多数の国民を国境警備や拠点防衛のための兵員として動員したために，生産力をいちじるしく低下させた。工業生産物の輸出は停滞した。農業は自給自足にほど遠いありさ

まであった。当然，スイス人の生活は困難におちいった。

1914年を100とすると，生計費は1918年に229に高騰していた。物価上昇に見合う収入を得るどころか，スイス人の実質的な平均賃金は，1918年には（1914年と比較して）25ないし30パーセント低下していた。闇商人や密輸業者が羽振りをきかせるのとは対照的に，サラリーマンと労働者の生活は困窮化の一途をたどった。(8)

これと平行するように，1915年にツィンマーヴァルト，1916年にリースタールで，相次いで社会主義者の会議が催されていた。これには1914年8月末にスイス入りしたレーニンの影響が強くはたらいていた。労働者は武器をとるべきではない，という平和主義が説かれる一方で，ブルジョワジーを打倒するためであれば武器を拒んではいけないとも主張された。

1917年6月にスイス社会民主党が党大会において国土防衛政策を絶対多数の票で否認した。時あたかも大戦のさなかであってスイスが国境の警護をつづけている時期にしては奇妙な決議であった。この年の秋からスイス国内で就業者のストライキが頻発した。ついに11月10日から11日にかけてチューリヒで，11日から14日にかけてスイス全土でゼネストが実行されるに至った。そればかりでなく，スイスの安全を外側からおびやかす力に抵抗するためであるはずの軍隊が，スイス国内のストライキ鎮圧に使われる事態に発展した。結局，スイス連邦政府の最後通告の前に大部分の労働者がストライキの続行を断念した。

たいそう複雑なできごとを可能なかぎり簡略化してデッサンしたにすぎないが，世界大戦中にスイスはこのような不安定きわまる様相を呈していた。こうした事態に皮肉な追い打ちをかけたのが1918年秋にスイス全土に流行したインフルエンザだった。国境警備についていた軍隊でも，これによる死者の数が1500を超えた。

これらの歴史的な事実を，イングリーンの小説の人物たちの運命と重ね合わせてみれば，作者が世界大戦時のスイス人の生きかたを鮮明な図式にして彼らに演じさせたことが理解できる。

アマン家の長男ゼヴェリーンは，東部スイスの親ドイツ的な新聞の編集

員であって，ニーチェ流の超人思想に魅力を感じているせいもあるが，ストライキする労働者に対してまったく理解を示さず，逆にその反動でますます保守主義者になっていく。父親譲りの企業家のリベラリズムを最良のものと信じていて，このリベラリズムを守るためにも労働者のストライキを力ずくで押さえ込むことを辞さず，右翼的な思考に傾斜していく。

次男パウルは，兄と対照的な考えかたと生きかたをする青年として描かれる。彼はスイス社会も功利主義と物質本位にいろどられたブルジョワ社会にすぎないと思い，この社会を支える人々を理想主義者呼ばわりするのは恥知らずなことだと考えて，チューリヒの労働者たちと連帯する。共産主義を支持する文士たちの仲間に入って両親と断絶する。動員されて兵役についたあとで，社会民主主義者の陣営に加わる。同志たちとともに街頭に出てデモをおこなう。しかし，結局は挫折を味わって親の家に戻る。

三男フレートは，政治的な意識を鮮明に持って好対照を示す兄たちの間にはさまって立場をきめかねている。何を考えるにつけても極端に走ることができない。そうこうするうちに農業に従事する従兄弟クリスティアーンに魅力を感じて，大学での勉学を中断して農業の実習を開始する。アマンの家系も，さかのぼれば農家であった。

この3兄弟の思考と行動を3本の平行線として描くのではなく，これらの線を接触させたり交差させたりすることによって，作者イングリーンは危機時代のスイスにおける若い世代の葛藤を表現しようとした。軍隊によるスト鎮圧やインフルエンザの流行といったことも織り込まれている。

ゼネスト鎮圧のためにクリスティアーンを含む農民部隊が駆り出されてチューリヒの労働者に立ち向かう。この時クリスティアーンは悪性のインフルエンザに教われて野営地で死ぬ。フレートはこの知らせに動転しておおいに怒り，共産主義憎さのあまり，ゼヴェリーンが結成した右翼的な愛国主義政党に加わろうとする。しかし，フランス語系の西部スイス人である軍医ルネに説得されてフレートは入党を思いとどまる。

アマン家には3兄弟の他に娘ゲルトルートもいる。彼女は職業軍人であるハルトマンと結婚している。この男はドイツ皇帝が象徴してきたような

プロイセン流の軍国主義を尊敬する人物である。生真面目ではあるが，夫婦間の情感の暖かさの欠如を不満とするゲルトルートは結婚を解消する。彼女はパウルの友人である詩人アルビンに魅力を感じて親しく交際するようになるが，このアルビンもインフルエンザの犠牲になる。ゲルトルートも親の家に戻ってくる。

5．アマン家の売却と新築の寓意

イングリーンが誕生したのは1893年7月末であったから，第1次世界大戦の勃発した時点では満21歳になったばかりだった。アマン家の息子たちの直面した問題は作者自身の世代の問題にほかならなかった。

彼が『スイスを映す鏡』の執筆を開始したのは，1931年頃であったと推理される。この年の4月に親友に送るつもりで書いた手紙の下書きに，こんな文章が書かれていた。

芸術作品が現実を鏡に映すのであるのなら，私の場合，この現実は手段にすぎず，目的ではありません。この手段が北緯46度と48度の間にある凹凸のある地表の一部であって，運命によって私がそこの土地で生まれたからといっても，このスイスに，人間としての存在よりも大事なテーマがあるという気にはなれません……。つまり，スイスを映す鏡ではなく，ひとかけらの地上の土地，たまたまスイスと呼ばれる土地を映す鏡であるのです。(9)

イングリーンは「政治的な小説」を書く意志がないと言ったが，7年後に完成した作品に，この手紙の下書きで否定した「スイスを映す鏡」というタイトルをあたえた。しかも，その時に彼はすでにアマン家の父親と同じ世代の人になっていた。あたかも，自分の子供たちの世代に対して，前の世界大戦の歳月に体験したような思想と行動の迷いを繰り返してくれるなと言いたげだった。あの時代の人間的な苦悩を描くことによって，彼の小説は必然的に政治的な小説の性格を帯びないではいなかった。

ここまでもっぱらアマン家の息子たちと娘の生活態度を語ってきたのだが，それらの若者たちの生活と意見を平行して並べるだけであったなら，小説の主題も枠組みも拡散してしまったことだろう。作者イングリーンは，拡散を予防するために，太い幹を用意していた。それはアマン家の住む家屋であった。

アマン家は，チューリヒの郊外に独立した家を持っていた。18世紀に建てられた，スイス独特の伝統的な形を持つ木造の家屋である。チューリヒ市の市街地が広がって，家屋の波がアマン家の近くに迫ってきた。もはや古い家屋に執着していられない状況になって，父親アマンは売却を決意する。小説はスイス伝来の構造を持つ家屋というモチーフを中心に据える。

イングリーンの作品が，表現のテクニックでは抑制のきいたリアリズムによってドイツ文学史で「新即物主義」の潮流に属する作品とされる一方で，批評家たちから「象徴主義」の色が濃い作品と呼ばれたのは，この家屋のモチーフによる。古いスイス連邦の枠組みが壊されて新しい時代にふさわしい国家の枠組みが模索されるさまを描いた小説と解釈されたのであった。

これまで住んで親しんできた家屋との別離から新築の家屋が完成するまでのプロセスは，古いスイスから新しいスイス，つまり18世紀に基礎を築かれたスイス連邦から20世紀のヨーロッパ全体を揺るがす試練に耐える新しいスイス連邦への変容のプロセスに相違なかった。この危機の時代にあえて土地を購入して家を新築する意志を，アルフレート・アマンが次のような言葉でゲルトルートに告げる。

「うれいしわ，パパ！　じゃ，とうとう，パパとママは，ふさわしい自宅を持つことになるのよね」

「できるだけ早く実行にかかるつもりだよ，このご時世だから若干の危険がともなうけれどもね。しかし，今のような根無し草の生活にはうんざりだ，もう御免だ！　家を建てるのだ…おまえがその気なら，いっしょに住める空間もあるんだよ……」(10)

この小説にはシュトックマイヤーという名の男が登場する。この人物は戦争をチャンスと見てうまく立ち回り，食料品の売買で暴利をむさぼる。「スイス的な家」を否定する精神の持ち主であって，それを彼の家の姿が象徴する。個性のない，茶褐色の，プロポーションの悪い，悪趣味な建物として描写される。

一方，アマンの新しく建つはずの家は，引き裂かれていた家族の者たちが和解したあとで，彼らをあたたかく迎える場所となるだろう。リアリズムの技法を保って語られるこの小説が，実は寓意にみちた作品であって，家のモチーフがその寓意の根幹をなすものとなっている。

大戦の集結とともに，スイス人の国家を分裂させていた争いがようやく鎮静する。小説の終わり近くでフレートと従兄弟ルネが，スイスの国家理念について語る。フレートがドイツ語圏スイスの，ルネがフランス語圏スイスの代表者の役目を，これまた象徴的に負っている。

「……言語やその他の違いがあっても，それらの中を精神的な親類関係が貫いている。ぼくらがスイス人であるのは，理性だけじゃなくて，その，何と言うか……」

「感情による繋がりでもあるんだ！……」(11)

言語や人種を単位とする近代の国家理念にそぐわない多言語国家スイスが「統合されたヨーロッパの縮図」となるはずだ，とルネが語る。

「ぼくらの国が手本であるなどと言う気はないし，自分の国を褒めそやす気もない。ぼくらには控えめであるべき理由があるのだもの。しかし，ぼくらの小さな例がヨーロッパ統合の可能性を思考させつづける力になってくれれば嬉しいね」(12)

作者イングリーンは，スイス国内で対立していた陣営のどちらの側にも

距離を置いて，第１次世界大戦時のスイスの姿を「鏡」に映してはいるのだが，読者として率直に感じるところにしたがえば，両極端の立場を選んだ兄たちの間にはさまってうろたえていたフレートをもっとも好意的に描いているという印象は否定しようがない。このフレートが愛するのは「スイス風の農家」である。さまざまな対立がもっとも鮮明に見てとれた都会チューリヒに「鏡」をかざした作者が，スイス中央部の農村地帯の出身者であったこと，そして「時代精神」が危険な形で現れた都会から離れたところにスイスの連邦主義の根がある，と信じていたらしいこともまた否定できなかろう。

6．20世紀スイス文学史の中での「家」のモチーフ

イングリーンのこの小説が1938年にドイツのライプチヒで初めて活字になったという事実は謎めいていて興味深い。当時ドイツは，ヒトラーを首班とする全体主義の体制下にあって，ナチズムのイデオロギーにそむく文学作品をきびしく禁じていた。あの頃のドイツは，スイスのドイツ語圏をドイツ帝国の支配下におくことを意図していた。スイス政府はヒトラー政権の誕生直後からこれを警戒して，第１次世界大戦中の国内世論分裂の二の舞を避けるために「精神的国土防衛」の名のもとで全体主義に抵抗するキャンペーンをおこなっていた。イングリーンの小説もまた，この精神に矛盾するものではなかった。親ドイツ的な立場をとる長男が挫折することにも作者の立場が見てとれた。その意味で，この小説はけっしてナチ時代のドイツに迎合する作品ではなかった。むしろその逆であった。(13)

一方，ドイツの側では，小国スイスの精神的な狭隘さに耐えられずに親ドイツの立場を鮮明にしていたスイス作家ヤーコプ・シャフナーを筆頭として，スイスの高名な作家たちと友好的な関係を生もうとしていた。イングリーンの小説の是認したのは，部分的にもせよ，親ドイツのイデオロギーが語られていて，その上に，ナチズムの文学理論で喧伝されていた「血と土」の理念に合致する要素があると見たのだろう。フレートが農家に心を寄せるくだりがその例であった。

逆に，ドイツでの出版を望む理由がイングリーンの側にもあった。ドイツの読者にスイスとスイス人の立場を理解させたいという願いであった。スイスにおいてドイツの版元から販売権を得ようとしていたチューリヒの書店が，ライプチヒの出版社がナチ党と無関係であることを強調しようとした事実が証明するように，ドイツでの初版発行には若干の思惑が伴わないわけにいかなかった。(14)

作品そのものの外側でのこの種の現象を通じて浮かび上がってくるのは20世紀のスイス文学，とりわけ2度の世界大戦とその前後の時期の小説における「家」や「家庭」のモチーフの問題である。ヤーコプ・ボスハルトの『砂漠で叫ぶ人』，アルビン・ツォリンガーの『フライパンの柄』，マックス・フリッシュの『扱いにくい人びと』，ペーター・ビクセルの『季節』など，一連の作品が，スイス人の「家」をモチーフとすることによって「精神的国土防衛」への参加または批判の性格を帯びている。それらの小説群との比較の視点からイングリーンの『スイスを映す鏡』を検討する余地がまだ残されている。本稿の延長線上でここに名前のあがった作品について語る機会の到来を待ちたいと思う。(15)

註

(1) Meinrad Inglin: Schweizerspiegel. Neue Fassung (Zürich 1955), S. 7.
(2) Inglin: S. 8.
(3) Vgl. Emil Stieß: Illustrierte Geschichte der Schweiz. 3. Bd., Zürich 1961, S. 260f.
(4) Vgl. Stieß: S. 264.
(5) Inglin: S. 148f.
(6) Inglin: S. 155f.
(7) Inglin: S. 342.
(8) Vgl. Schweizer Monatshefte, Sonderheft: Landesgeneralstreik 1918. Zürich 1968, S. 761f.
(9) Meinrad Inglin: Die Briefwechsel mit Traugott Vogel und Emil Staiger. Zürich 1992, S. 259f.
(10) Inglin: S. 429.

(11) Inglin : S. 657.

(12) Inglin : S. 658.

(13) Vgl. Ulrich Rindlisbacher : Die Familie in der Literatur der Krise, Bern u. Stuttgart 1987, S. 204f.

(14) Vgl. Inglin : Die Briefwechsel, S. 276f.

(15) Vgl. Martin Kraft : ‹Schweizerhaus› das Haus-Motiv im deutsch-schweizer Roman des 20. Jahrhunderts. Bern u. Frankfurt/M. 1971.